

序

「火のない所に煙は立たない」と言えば、およそ悪い噂の譬えに使われることが多い。「ある風聞がある以上、それなりの事情があった筈だ」という推定である。確かに遠くからでも煙が見えれば、そこに何か燃えていそうなことは分かる。裏返せば「何も見えない所には、何かがあるか分からない」ということになる。しかし何も見えないからと言って、そこには何も無いということにはならない。遠くて見えない場合は勿論のこと、近くに何かがあっても全く気のつかないこともあるからである。いずれにせよ何かの存在は認識論的な解釈かも知れないが、その方法、動機を別にして何らかの形で見えることによって初めて確認できることになる。当事者としては事象の確認があって初めて、その後取るべき対応が決まるのであるから、何かを見えるようにする努力があらゆる活動の最も基本的な行為ということになりそうである。

所が生物学によれば、脊椎動物の脳から出ている十二対の脳神経の内、脳が一番前方から出ているのが嗅神経、二番目が視神経ということで動物は先ず嗅ぐことで外界を探っているのだと言う。野性の動物がいち早く身の危険を感じて逃避できる能力もこうした感覚によるものと考えられる。確かに「何か臭い」という表現の方が何かの存在を感知する際のより動物的感覚のようにも思える。例えば、何も見えないのに何かの存在を意識することがある。誰もいない筈の部屋に人の気配を感じたり背後に誰かの視線を察知したり、より研ぎ澄まされた神経の剣客になると闇夜の中に殺気を感じたりするのも、あるいはこの嗅覚によるのかも知れない。

恐らく人間の場合、記号や文字の発明など視覚的表現方法の進歩と相まって嗅覚が退化し、外界に対する認識手段も次第に視覚に頼るようになっていったのであろう。研究とは見えないものを何らかの形で見えるようにする行為であるとすれば、研究者にとっては見えるようにする努力の前に何も無い所に何かがあるという感覚が先ず必要のように思われる。それは必ずしも視覚とは限らず、他には見えないけれども何かが見えるという何らかの感覚であり、勘のよさ、感性の鋭さ、問題意識とでも言うべきものである。例えば如何に整然とした論理でも「何か臭い」と感ずるならば、そこには研究上詰めるべき何かがあると考えてよい。

1992年4月

清水建設幹技術研究所長

工学博士 太田利彦